

## 認知地図を通して見た地域への認知と愛着に関する考察

### A Study of Cognition and Affection to the Region Seen from the Cognitive Map

巖 爽\*  
Shunag YAN

After the War, townscapes in Japan have greatly changed. On the other hand, it has been said that people's pride and affection to their own towns have weakened due to the uniformity of townscapes lined with the national roads and bypasses. It is necessary for us to clarify how the people in the region recognize and feel attached to the towns where they were born and have grown up, for making a future town design.

In the present study, we aimed to understand the level of cognition (physical cognition) to be conceived from the "cognitive map" (a mental map in the brain memorizing the images of special locations of surrounding environment) and the level of affection (emotional cognition) which is a feeling of attachment. It was found that a town that is easy to be recognized and loved by the people living in the region is required not only to offer conveniences through various functions such as public and commercial facilities, but also to be a place full of natural beauty and greenery where people can settle down comfortably.

#### 1. 研究の背景と目的

地方都市の衰退、郊外住宅地の空洞化、自動車への依存によって画一化が加速するロードサイドの街並みが問題視されて久しい。一方、日本の美しい街並みを取り戻そうとして、「美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済および地域社会の健全な発展に寄与すること」を目指した景観法が平成16年に誕生した。

そのなか、美しい街並みを取り戻すための取り組みとして、歴史ある日本橋の上を横断する首都高速道路を移設する計画が打ち出されている。一方、生まれてから日本橋の上に首都高速道路が聳え立つ景観を見慣れた若者にとって、この景観は心の原風景になっているとも言われている。

美しい街並みとは何か、そのまちに生まれ育った人々がまちに対する愛着とはなにか。このような問題意識の元に、本研究では「認知地図」(周囲環境の空間的配置に関してもつイメージを頭の中で記憶している地図)を通して見えてくるまちへの認知度(物理的認知)と、思い入れのある建物やまちに対して持つイメージ及び評価における愛着度(感情的認知)を把握することを目的とする。

異なるまちの形態として「バイパス沿いの住宅地」(以

下、住宅地)、「地方都市の市街地」(以下、市街地)、「農村地」の3パターンから、それぞれの地域に暮らす住民が抱くまちへのイメージと愛着との関係を比較し、高度経済成長期から形成されてきた我が国の街並みの特徴を考察していく。さらに、物理的認知と感情的認知の関わりにも着目することで、生活の基盤となる環境に対する愛着に左右する要素への解明を試みる。

#### 2. 調査の概要

宮城学院女子大学生生活文化デザイン学科4年生を居住地

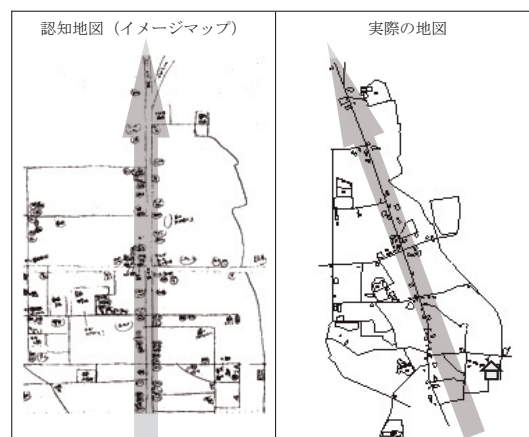


図1 認知地図と実際の地図の比較

\*宮城学院女子大学生生活文化デザイン学科

域別に計11名(住宅地5名、市街地3名、農村地3名)を調査対象者として選定した(表1)。なお、生まれ育った地域に最低10年以上の居住歴を有することを条件とした。

調査方法は調査対象者に認知地図の見本を示し、各自の認知地図を描いてもらうイメージマップ法(図1)を中心とした。まちへの愛着度を探るべくアンケート調査も併せて行った。さらに同地域居住者での比較としてその家族または地域に居住している方にも地域への愛着度に関するアンケート調査を行った。

### 2-1 分析方法

分析Ⅰ: イメージマップによる物理的認知度調査(学生対象)である。地図の表し方、認知距離、重要度対象物の特徴などを通して認知度に関わる特徴を捉える。

分析Ⅱ: アンケートを通してみたまちへの愛着度調査(学生・家族等対象)である。

本研究では、まちへの思い出、過去から継続されてきた人間関係やなじみの店などを通して、まちへのイメージや評価を捉え、まちへの愛着度として評価する。

分析Ⅰにおけるイメージマップ調査では、個人のイメージを探求する為に分析・考察を表2に示した4つの項目で行い、描画された空間要素の特徴を明らかにしていく。

## 3. 認知地図を通して見たまちへの認知度

### 3-1 認知地図における地域別特徴

認知地図と実地図を比較し、表2に示した①~④の項目に沿って分析を行った。地域別の共通点と特徴を以下のようにまとめた。

#### ①自己定位

表1. 調査対象者

対象	地域名-学生-	家族・地域の方
住宅街 (5名)	①岩手県盛岡市-Fさん	父・母・姉
	②仙台市泉区-Tさん	父・母
	③仙台市宮城野区-Sさん	父・母
	④仙台市太白区-Mさん	父・母
	⑤福島県福島市-Yさん	父・母
市街地 (3名)	⑥宮城県南三陸町-Sさん	父・母・祖母
	⑦仙台市宮城野区-Wさん	父・近所A・B・C
	⑧仙台市宮城野区-Mさん	父・母・弟・近所A
農村地 (3名)	⑨山形県朝日町-Hさん	父・母
	⑩宮城県加美町-Kさん	母・姉・祖母
	⑪宮城県栗原市-Sさん	父・姉・弟・近所A

表2. 分析項目およびイメージ地図に描かれた空間要素

①自己の定位	マップの方位によってどのように自己の定位を行っているか。
②描かれた空間要素	空間の認知の程度、関心の度合いを探る。空間がどのような性質であるものかを分類して集落の空間特性との関連を考察する。
③イメージ範囲	記入された空間要素のエッジを結んでイメージの周りをみる。景観形成の要素も加える。(例: 北に○km、最高○km、全体として直径○kmを認知している。面・線・点的である。)
④全体的な特徴	マップの全体的な特徴をまとめる。

・住宅地: 認知地図の中心に国道を描く対象者の割合が半数を占めており、自宅と国道の位置関係を意識しながら認知地図が描かれていた。

・市街地: 自宅からの広がりを中心に認知地図が描かれている。

・農村地: 認知地図が広範囲にわたり、まち全体が描かれている。一方、描画密度が低い。

#### ②描かれた空間要素(表3)

・住宅地: 国道バイパス沿いに立ち並ぶチェーン店が多く描かれた。

・市街地: よく利用するチェーン店の他、自然要素も多く描かれた。

・農村地: 自然要素と公共施設が多く描かれた。

表3. 地域別にみた描画要素  
(◎: とても多い、○: 多い、△: 少ない、×: ない)

描かれた空間要素	自然要素	公共施設	老舗店	公益施設	自宅	チェーン店	事務所	工場、空き地
住宅地	△	○	×	○	○	◎	△	×
	△	△	×	○	○	◎	△	○
	○	○	×	△	×	◎	△	×
	△	○	×	○	○	◎	△	○
	○	△	×	△	◎	◎	○	△
市街地	◎	○	◎	◎	◎	◎	○	○
	◎	△	○	○	○	◎	○	△
	◎	△	○	○	△	◎	○	○
農村地	◎	◎	○	○	○	◎	△	△
	◎	◎	○	○	○	○	×	×
	◎	◎	○	◎	○	◎	△	△

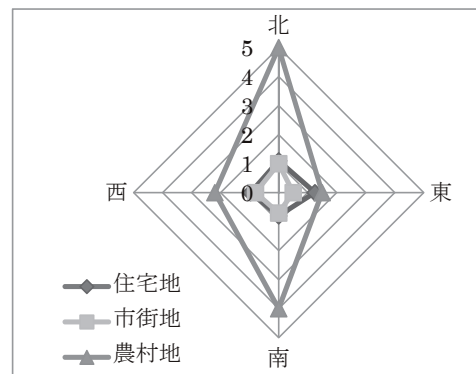


図2. 認知地図の範囲

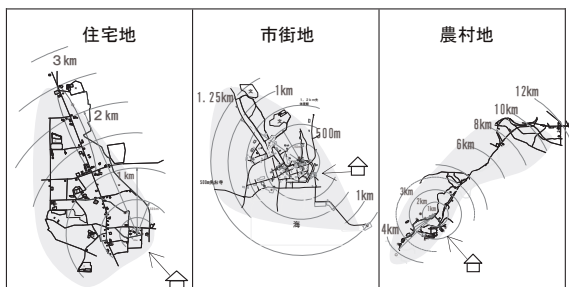


図3. 認知地図に描かれたイメージ範囲(例)

③イメージ範囲

住宅地と市街地の平均範囲はほぼ同様であり、約2km圏内となっている。一方、農村地が非常に広範囲になっており、特に南北方向では約10km以上に達している（図2）。

④全体的な特徴

住宅地に居住している調査対象者の約半数は国道を中心に認知地図を描いた。また、国道バイパス沿いに並ぶチェーン店の認知度が高いことから、国道バイパスは物理的に記憶されやすい場所である事が明らかになった。

市街地居住者は自宅を中心とし、そこから広がるように細かく描かれている為、認知範囲が狭くなっている。また、描画要素に偏りがなく満遍に且つ正確に描かれており、地域性が良く出ている特徴があるといえる。

農村地居住者は生活範囲広域にわたる為、認知地図も広範となり、まち全体が描かれている。描画密度は低く、道路距離や方位のズレ、建物配列の間違いなどが多く見られた。

4. 評価と構造についての分析

ここでは考察項目をさらに物理的に認識されている要素を「構造要素」、まちに対する認識や評価などを「評価要素」

素」(表4～表6)として分析を試みる。

4-1 住宅地 (表4)

構造 (①～③)

- ① 国道を中心とされているものと自宅を中心とされているものとは、割的に半々である。その中心から広がるように面的に描かれている傾向がみられた。
- ② チェーン店が多く印され、特にそれらは国道、バイパス沿いに並ぶものである事が多い。
- ③ 自宅からの道のり最大距離は、約1kmから3kmまでと幅広く、個人差で違いが見られた。しかし、認知範囲が通っていた学校までを区切りとする事は共通しており、それにより自宅と学校の距離関係で範囲の大きさにばらつきが出たとも考えられる。また、国道を中心に描く調査対象者の方が認知距離的に長くなっていることも明らかになった。

評価 (④～⑥)

- ④ 生活平均距離（買い物場所や好きな場所など、生活における行動範囲や着目する場所の領域）を探る調査では、回答場所を平均すると1km以内である。
- ⑤ 新店舗が建ち並ぶエリアで、方位や店舗配置のズレが見られた。通学路であっても小道や住宅路地で距離の

表 4 住宅地で得られた認知構造と評価

住宅街 (5)		盛岡市	泉区	宮城野区	福島市	太白区
構造	①自己定位 (認知構造)	国道中心 (面・線的)	国道中心 (面的)	自宅中心 (面的)	自宅中心 (面的)	道路中心 (面的)
	②描画要素	チェーン店	チェーン店	チェーン店 公共・公益	チェーン店	チェーン店 住宅・自然
	③最大直線距離 (道のり距離)	2.5 km (3.3)	2 km (3.2)	2 km (2.4)	2 km (2.3)	1 km (1.1)
評価	④生活平均距離	(0.9 km)	(0.7 km)	(0.6 km)	(0.6 km)	(0.6 km)
	⑤認知地図と実地図のズレ	バイパスを抜けた小道の道路距離	路地、道路方位 (バイパス)、店舗配置 (大型チェーン店)	道路方位 (新しいショッピング街)	道路距離 (中学校)	若干の道路方位 (川沿い)
	⑥場の意味付け・好きな場所・まちの象徴物	好 自宅	好 自宅	好 近所の空地	好 自宅	好 家のベランダ
	象徴 (理由)	スポーツ施設 (規模) 幼稚園 (近所)	スーパー (利用)	病院 (近所)	小中学校 (規模) 銀行ビル (規模)	市体育館 (規模)
	まとめ 認知密度 (○密/△普通/×疎)	バイパス沿いがよく認知されている。通学路付近を標記。また、自然要素が抜けている。	ご近所や住宅路地を細かく認知。しかし、住宅路地や新店舗の配置にズレが生じている。	まちを地区内で捉えられている。近所の住宅は描かれず、また、道路角の建物が書かれている傾向にある。	印された建物が少なく、全体的に密度が低い。大きい建物が描かれている傾向にある。	距離範囲は狭いが、認知密度が濃い。しかし、それ故にバイパスが無標記だった。
	△	△	△	×	○	

表 5. 市街地で得られた認知構造と評価

市街地 (3)		志津川 (商店街内に自宅)	宮城野区・福住町	宮城野区・東仙台
構造	①自己定位 (認知構造)	自宅中心 (面的)	自宅中心 南北逆 (面的)	通学路 (自宅) 中心 南北逆 (面・線的)
	②描画要素	自然・老舗・公共・公益・チェーン店・住宅	自然・チェーン店・公共	住宅・公共・公共・老舗・自然・チェーン店
	③最大直線距離 (道のり距離)	1.3 km (1.6)	1.5 km (1.9)	750m (800)
評価	④生活平均距離	(0.7 km)	(0.8 km)	(0.4 km)
	⑤認知地図と実地図のズレ	道路距離 (中学校)	道路距離 (新店舗)	道路方位、商店街の店舗配置
	⑥場の意味付け・好きな場所・まち象徴物	好 海岸沿い公園	好 自宅、川沿い	好 川、公園、駄菓子屋
	象徴 (理由)	公園 (まちの象徴)	公園 (景色)、動物病院 (近所)	ロータリー (象徴的植物があり公民館もある)
	まとめ 認知密度 (○密/△普通/×疎)	商店街内に自宅がある事により、商店街の認知も高く、活用はまち全体に及んでいる。わがまちを把握し、意識しているように思われる。	小学校時、商店街をよく利用していた為か商店街付近や、学校付近の認知度が高いが、全体的な描写の密度は薄い。自宅から多少商店街が離れている為か、生活評価距離が長めである。	商店街周辺の認知度が高く、描写も非常に密である。通学路の認知度も高く、正確に書かれていた。しかし、それ以外の地図は描かれておらず、認知度が高いエリアと低いエリアがはっきりしていた。
	○	△	○	

ズレがあった。

- ⑥ 好きな場所として「自宅」が多く挙げられた。象徴的な建物は近所にある規模の大きめな商業施設や公共・公益施設を挙げる調査対象者が多く、まちの象徴物は「目立つ」といった要素が重視されていると思われる。

4-2 市街地 (表5)

構造 (①~③)

- ① 市街地の全ての調査対象者が、自宅を中心としてそこから広がるように面的に描かれている。また地図を描く際、2人が南北逆さだった。
- ② 公園や田畑などの自然要素や、公共・公益施設、老舗、チェーン店というように偏りなく印されている。また、他の地域ではほとんど無い老舗が多く印されており、商店街区域ならではの特徴が見られた。
- ③ 道のり最大距離はおよそ1km前後であり、住宅地被験者と同様に通っていた学校を区切りに認知地図が終わっている。

評価 (④~⑥)

- ④ 日常の行動範囲は距離的に住宅地調査対象者と差はほとんど無いが、好きな場所や買い物場所、まちの象徴となるものとして挙げられた数は住宅地の被験者よりも比較的多く、まちの中心部を活用しているように思われる。

- ⑤ 認知範囲が狭い故に極端なズレは少なく、ほぼ正確ではあったが、新店舗エリアまでの道路距離や学校を繋ぐ一本道での距離のズレ、また、商店街の店舗配列の間違いというように、それぞれでズレは見られた。

- ⑥ 好きな場所が自宅以外の公園や川沿いである事が3人とも共通しており、自然的要素に向けられている様子が分かる。また、まちの目印は近所の公園、ロータリーと言うように地域の公共施設・空間である傾向が見られた。

4-3 農村地 (表6)

構造 (①~③)

- ① 自宅以外の道路や市街地を認知地図の中心とし、自宅は用紙の端に印されている。全員南北逆さに書かれていた。
- ② 山や川、田園が描写され、周囲の自然豊かな風景がよく表されていた。また、建物としては公共施設が特にしっかりと印されている。コンビニや大型チェーン店もよく記憶されている傾向があった。
- ③ 農村地も学校を区切りに認知範囲が途切れていた。しかし、農村地の場合は通学距離が長くなる為、約10km以上が認知範囲であるように、他の地域と比べて一段と長距離になってしまっている。

表 6. 農村地で得られた認知構造と評価

農村地 (3)		朝日町	加美町	栗駒町
構造	①自己定位	バイパス (自宅) 中心 南北逆 (線的)	一般道中心 南北逆 (線的)	商店街中心 南北逆 (面的)
	②描画要素	自然・公共・チェーン店	自然・公共	公共・公益・チェーン店・自然
	③最大直線距離 (道のり距離)	1.2 km (14.9)	1.1 km (12.5)	4 km (5.7)
評価	④生活平均距離	(5 km)	(3.8 km)	(3.6 km)
	⑤認知地図と実地図のズレ	道路距離、方位 (隣の市)	道路距離 (町の中心市街地まで)	道路距離 (商店街までを繋ぐ道)
	⑥場の意味付け ・好きな場所 ・象徴物	好 公園 (象徴、眺望)	自宅、川沿い、山 山 (象徴)	球場、公園、喫茶店 中学校 (規模)
まとめ 認知密度 (○密/△普通/×疎)		△	×	△

表 7. 認知構造と評価の地域別特徴

平均共通		住宅街 (5)	市街地 (3)	農村地 (3)
構造	①自己定位 (認知構造)	国道と自宅中心 (面的)	自宅中心 (面的)	道路中心 (線的) 南北逆
	②描画要素	チェーン店	自然・老舗・公共公益・チェーン店	自然・公共施設 チェーン店
	③最大直線距離	直線距離平均 1.9 km	直線距離平均 1.2 km	直線距離平均 9 km
評価	④生活評価の平均距離	0.7 km	0.6 km	4.1 km
	⑤認知地図と実地図のズレ	新店舗エリア付近の道路方位、店舗配置のズレ	認知度の低い場所までの道路距離	地域と地域を結ぶ道路距離
	⑥場の意味付け ・好きな場所 ・まちの象徴物	好き 自宅 ・建物規模が大きい ・自宅案内の目印的要素	公園・川 ・象徴的公共空間 ・地区の公共空間、施設	公園 ・まちの象徴的公共空間
まとめ 認知密度 (○密/△普通/×疎)		△	○	△

評価（④～⑥）

- ④ 認知距離が長い分、生活範囲も大きくなっている。
- ⑤ 地域と地域を繋ぐ道路の距離、または方位にズレが見られた。それらは一本道であり、建物が少ないからであると思われる。
- ⑥ 好きな場所とまちの象徴物は、どちらも自然要素であり、まちの代表的なものをよく捉えていた。まちの特徴を掴んでいる様子が窺える。

4-4 地域別の特徴（表7、図3）

**住宅地：**認知範囲や認知度にばらつきがあり個人差が窺えるが、共通している点は認知範囲に対して生活評価範囲（生活評価の平均距離）が狭いことである。まちの利用範囲が狭いと捉える事が出来る。また、住宅路地の細かい描写によって実際の地図より大きく書かれた自宅周辺は、認知度が高い事が分かる。さらに、目印の少ない住宅路地では角に建つものを描く傾向にあるが、それは正確で認知度が高いとは言えず、角の建物が目印として記憶されやすいものであるとは言い切れないようだ。描画要素はチェーン店の標記が多く、日常でよく利用している様子が窺える。

**市街地：**認知範囲距離が狭い分、極端なズレもなく、描画密度が濃く書かれていた。描画要素に偏りがなく、商店街に並ぶ老舗も詳しく描かれており、地域性がよく表れた地図である。また、まちの目印や好きな場所は公園や川と言った自然的要素が多く、公共施設の利用も高い事から、よくまちを活用していると言える。しかし、商店街が身近にありながらも、日常的な買い物はスーパーとされ、商店街は認知されているものの普段の利用は少ない様子であり、商店街の衰退が進んでいるように思われた。

**農村地：**まち全体を認知範囲として描かれている為、描画密度は薄く、全体から見ると認知度は低いが、距離範囲は非常に大きくなっている。故に、方位よりも生活目線を重視した描かれ方であり、全員が南北逆さに書かれていた。また、隣町まで範囲が及んでいる傾向にあり、町を繋ぐ道が長距離である為、認知距離のズレが見られた。まちの評価として自然要素に向けられており、農村地の風景にそれぞれの思い入れが感じられた。

表 8. 通学手段と認知距離の比較

		小・中・高の通学手段	認知距離
住宅地	岩手県盛岡市	徒歩・徒歩・自転車・車	3.3km
	仙台市泉区	徒歩・自転車・車・電車・バス	3.2km
	仙台市宮城野区	徒歩・徒歩・電車・自転車	2.4km
	仙台市太白区	徒歩・徒歩・電車・自転車	1.1km
	福島県福島市	徒歩・徒歩・電車・自転車	2.3km
市街地	宮城県南三陸町	徒歩・徒歩・徒歩・電車	1.6km
	仙台市宮城野区	徒歩・徒歩・自転車	1.9km
	仙台市宮城野区	徒歩・徒歩・自転車・	0.8km
農村地	山形県朝日町	バス・自転車・車・電車	14.9km
	宮城県加美町	徒歩・バス・自転車・車	12.5km
	宮城県栗原市	徒歩・バス・自転車・自転車	5.7km

5. 認知距離に影響を与える要素に関する考察

ここでは認知距離に影響を与える要素を探るため、調査対象者の小・中・高の通学手段と認知距離を表8に示す。農村地では高校から車を利用した通学が多く、認知距離が10km以上に及ぶ。住宅地でも高校から車を利用した通学が見られ、認知距離が比較的広い。もっとも認知距離が短いのは市街地に居住した調査対象者で、通学手段も自転車が多い。

図4に地域別における通学路と生活距離の変遷を示した。農村地と市街地居住者の場合は通学距離と生活距離が一致している。住宅地に住む人は中学校を境に生活距離が通学距離を超えるケースが多く、他の地域はほぼ一致している。

認知距離と生活距離についての考察（図5）においては、各地域に異なる傾向がみられた。前述したように、住宅地と市街地の認知距離はほぼ同様である一方、農村地はその約5倍に広い。また、生活距離においては住宅地、市街地、農村地順で広がっている。

認知距離と生活距離の差に関しては、市街地と農村地はいずれも認知距離は生活距離の倍になっている。一方、住宅地の場合は認知距離は市街地とほぼ同様なものの、生活距離はその半分しか満たしていない。住宅地での生活は比較的狭い範囲で展開されているように思われる。

6. 生活評価の特徴

6-1 評価

個々人のまちの評価として、調査対象者に表9に挙げられる項目を認知地図に記入してもらった。

遊び場所に関しては「通学手段と認知距離」で考察した

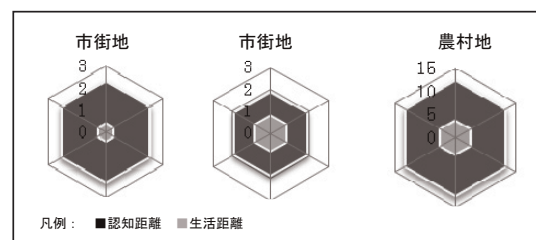


図 5. 認知範囲と生活範囲の比較

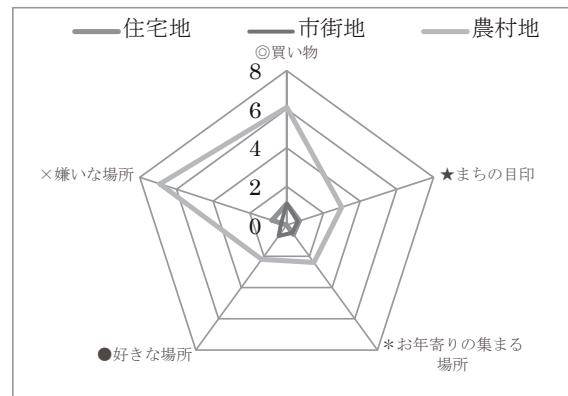


図 6 地域別で見られる評価（数値は回答数を示している）

ように通学路距離に比例し、学年が上がるごとに駅周辺を利用し、買い物目的の遊び場が増えている。また、全員共通していた「買い物先」は郊外に建つチェーン店であり、市街地居住者も商店街が周囲にある環境でありながらも普段の利用は少ない事が窺える。しかしながら、それ以外の項目に置いて地域の公共施設や公園等の自然空間を多数選択している事が多く、市街地が一番地域に密着した生活であるように思われた。農村地居住者も市街地同様、公共や自然空間に目を向けている傾向にあった。

住宅地は全体的に商業施設の利用が多く、公共施設、自然的要素のものが少ない。さらに、好きな場所を自宅とする回答が多数見られ、この生活評価における住宅地居住者のまちへの思い入れは低いように思われる。

嫌いな場所に関しては特に地域別の違いは見られず、通りにくい場所、暗い場所などが挙げられた。また、お年寄りの集まる場所に関しては集会場が多く、地域の方が気楽に集まり、交流が出来る場所が好まれているようである。

### 6-2 生活評価範囲

上述したように、農村地の生活評価範囲が圧倒的に大き

表 10. よく利用する場所 (全体)

(理由・目的)	チェーン店	老舗	公共	公益	自然要素	家	他
①生活家事	4 8			1			
②交流			1		2	1	
③居合わせ	2				1		
④趣味遊び	4	1	3		2		
⑤家族と利用	8						
⑥必要目的	1			1			1
⑦余暇	3		2		1		
⑧一時的							
⑨通勤通学	2	1		3	1		
⑩その他		1			3		

表 11. よく利用する場所

学生	住宅地		市街地		農村地	
	盛	たもり①ホマック①イオン④⑦ファミ①⑥	志	ケズ④家裏の河原⑩志津川駅⑨ 図書館⑥⑦	朝	ヒグチ①サウス①
泉	ムサン④⑥	福	福住公園④⑩(町内行事)堤防、 河原④⑨	加	セブソイレブ⑨①あさりん⑨	
宮	TUTAYA④、カラオケ④図書館④ エック①⑤	東	案内公園(犬の散歩)宮の森① 図書館④ジヤスコ①ファミ①ブックオフ①	栗	セブソイレブ⑨①③丸江①⑤	
太	富沢駅⑨芥川⑨ (どこ行くにも通る)	(理由) ①生活家事 ②交流 ③居合わせ ④趣味遊び ⑤家族と利用 ⑥義務・必要目的 ⑦余暇 ⑧一時的 ⑨通勤通学 ⑩その他				
福	ファミマート①平野駅⑨ヨークベニマル①					

家族・地域の方	住宅地				
	盛岡	泉区	宮城野	太白区	福島市
	父:ホマック①東山堂④⑦ 母:ホマック①都南体育館④ イオン⑤② 姉:イオン①④⑤ツルハ① ファミ①駅④ホマック①	父:ジヤスコ①ヤマダ① 母:ヤマダ①ジヤスコ①⑤	父:無記入 母:西友①イオン① 宮の森①官学⑩	父:一番町⑦芥川④ 母:モル④ワカデ④ イオン①	父:チイ①西沢書店④ 県図書⑦ 母:ヨーク①チイ①⑤ パットドラッグ①
市街地			農村地		
志津川	福住町	東仙台	朝日	加美	栗駒
父:海浜公園④ 食堂④ 母:ウジエスパー① 祖母:ウジエスパー①	父:ヨーク①③⑤、福住公 園②③④⑥、ジヤスコ①④ ⑤⑦、高砂小④⑥② 近所 A:ヤマダ① エスパー④⑤ルコ④ 近所 B:セブソ①ヤマダ① ブックオフ④ 近所 C:無記入	父:ヨーク①ゲイソン⑥ ケーヨー⑥ 母:ジヤスコ① 宮の森① 弟:公園⑩犬の散歩 近所:ヨーク①ジヤスコ ①案内公園④	父:棚田⑦ 朝日自然観②④ カフェ蔵⑩食事 母:ヤマダ①創造 館④ジヤスコ①	母:ヨーク①イオン① 祖母:病院⑥向かいの家② 姉:小野田図書館⑦	父:丸江① 祖母:丸江① 姉:薬王堂①仙台銀行①丸江① チロル②⑦ 弟:セブソ①②③⑧薬王堂①たつ この①⑦六右衛門公園②③④ 友達:セブソ①

い事が明らかになった。

表7に示された(認知された)最大直線距離においても、住宅地が1.9km、市街地が1.2km、農村地が9kmという結果がみられた。よって、認知範囲と生活評価範囲は比例しており、生活の評価範囲がまちへの認知に繋がっていると言えよう。

## 7. アンケート調査を通してみた街への愛着度

### 7-1 よく利用する場所

#### □地域別

全体的にスーパーマーケットやコンビニなどのチェーン店が多く挙げられている(表10、11)。その理由として①の生活家事がほとんどではあるが、次いで⑤家族と利用④趣味遊びも多かった。公共の施設では④趣味遊び⑦余暇といった娯楽を求める目的が多く、自然要素をもつ公共空間では交流や遊び、散歩等の休憩目的が多い。

地域での特徴として、市街地では公園・河原などのような自然要素をもつ公共空間が普段から利用されていることが挙げられる。しかしながらそのような公共施設や空間は、地域の環境や施設の充実によって利用されるか否かが決まっていると思われる。

#### □居住者別

利用目的として母親は①生活家事が多く、一方父親は④⑦の余暇目的が多い傾向にある。

### 7-2 まちの象徴的な景観

#### □地域別

どの地域でも山や川は象徴的なものとして選ばれやすく、有名や美しい等の理由が挙げられている。このような自然

要素や公共施設が多い市街地と農村地に対し、住宅地では規模の大きいチェーン店や神社、街の行事など様々な意見が挙げられた。

□居住者別

学生よりも家族等の方が広範囲で象徴物を捉えている為、家族の方々は公共施設や自然物を選択する傾向にあった。

7-3 好きな場所・嫌いな場所

□地域別

地域別では特に特徴は見られず、全地域共通して自然や四季が感じられる場所が多く選択されていた。嫌いな場所には通りにくい道路や景観として汚い建物や場所と答えられている（表12）。

□居住者別

住宅地の何人かの学生が好きな場所に「自宅」を選んでいる反面、両親は自然が感じられる場所を挙げていた。しかしそれらは自宅近くの場所であり、主に自宅周辺に思い入れを感じているようであった。

表 12. 好きな場所、嫌いな場所について（数字は回答数）

地域	好きな場所	嫌いな場所
住宅地	自然物→13 公共物→2	路地・国道→1
市街地	自然物→12 行事→1 老舗→1 学校→1 その他→1	汚い場所→1 目ざわりなもの→1
農村地	自然→5 公共施設→2 老舗店→2 家→1	特に無しが多数

表 13. 地域別にみたまちに対する愛着ポイント（地域住民）

家族・地域			
盛岡	父 56	⑤	【住宅地】 街並み：1 行事：3 商業：3 人柄：6 その他：1
	母 21	③	
	姉 17	②⑤	
泉区	父 30	③④	自然 無記入 2
	母 30	④⑤	
宮城野	父 22		④⑦⑩周囲に自然が残されており、利便性との調和が図られている
	母 22	⑤	
太白	父 30		自然 無記入 2
	母 17		
	父 28	⑤	
福島	母 25	②③⑤	
	父 50	① ⑤	【市街地】 歴史：2 街並み：2 行事：2 商業：1 人柄：6 結束力：4
母 26	⑤⑥		
南三陸	祖母 60	⑤	なし：2
	父 22	③⑤⑥	
	近所 A3	⑤	
宮城野	近所 B3	思いつかない	なし：2
	近所 C3	⑥	
	父 28	特になし	
宮城野	母 25	②③④	【農村地】 歴史：2 街並み：5 行事：5 商業：1 人柄：7 その他：2
	弟 19	①	
	近所 16	⑤⑥	
朝日	父 50	② ⑤	歴史：2 街並み：5 行事：5 商業：1 人柄：7 その他：2
	母 49	⑤	
	母 48	①⑤	
加美	祖母 78	⑤	自然：2 その他：2
	姉 18	③⑦自然	
	父 52	③	
栗原	祖母 77	②⑤	自然：2 無記入
	姉 25	②③⑦自然・緑・星空	
	弟 17	②③⑤	
	友達 21	① ③④⑤	

凡例：  
続柄+数字：続柄+居住年数  
(例：父 50：父親、居住年数 50 年)  
①～⑦：愛着ポイント。①歴史 ②地域性が感じられる街並み ③行事  
④商業施設の充実 ⑤人柄 ⑥結束力 ⑦その他

また、「嫌いな場所」については男性（父親）からの意見が多く、このような意見をした男性の愛着度数も低い事から、まちへの思い入れが低い傾向にあると思われる。

居住年数による好きな場所・嫌いな場所の特徴は特に見られなかった。

7-4 愛着ポイント

まちに対する愛着を持てる要素を女子大学生の父母や知人などの地域住民（表13）、女子大学生（表14）、別でまとめた。

□地域別

全地域で「人柄」と「行事」の選択が多く、地域との交流が愛着に影響を与えている事が分かった。住宅地は「商業の充実」、市街地では「結束力」、農村地では「地域性」「自然風景」が次いで挙げられている。

どの地域もわがまちの特徴を捉えた地域環境が愛着のポイントとされている傾向にある。

□居住者別

愛着ポイントが集中した「人柄」は特に女性（母親）が選んでいる割合が高く、ご近所との繋がりを重視しているようである。

7-5 SD法を通してみた愛着度

愛着のポイントとしては、住宅地で「商業の充実」、市街地で「結束力」、農村地で「地域性」「自然風景」のように、地域ごとで特徴が現れた結果となった。しかし、全地域共通して「人柄」と「行事」の選択が多く、地域との交流が愛着に影響を与えているようであった。

SD法による愛着度調査から、農村地が一番高い数値である事が分かる（表15）。その他の地域では個人差でバラつきがあり、また対象者不足なため一概に評価は出来ない

表 14. 地域別でみたまちに対する愛着ポイント（女子大学生）

学生		愛着ポイント合計	挙げられなかったポイント
住宅地	盛 ① ⑥⑧⑩⑪	② ④②	①
	泉 ⑤⑨	静か 3	②
	宮 ⑤⑨	⑥②	
	太 ③⑥	地元、行事 3	
	福 ⑩	⑨⑩⑫⑬	
市街地	志 ① ⑧	①	②
	福 ⑤⑦⑧	自然 2	③
	東 ④⑥⑨⑫ (出身地、友達もいる)	⑤⑥⑦ 行事 2 ⑨⑫	⑩ ⑪
農村地	朝 ① ⑥⑦⑧	歴史、自然 3⑤②	②③
	加 ④⑤⑥⑦⑩	四季 3 地元 3	⑨⑪
	栗 ④⑤⑥⑦⑧⑩	⑧⑩⑫	

(愛着ポイント)  
①歴史 ②地域性が感じられる ③美しい街並み  
④自然 ⑤静か ⑥四季 ⑦地元 ⑧行事イベント  
⑨商業施設の充実 ⑩人柄 ⑪結束力 ⑫その他

表 15 SD法における愛着度ポイント

地域	学生	家族	
住宅地	岩手県盛岡市	17	14
	仙台市泉区	12	23
	仙台市宮城野区	13	-3
	仙台市太白区	4	12
	福島県福島市	19	16
	市街地	宮城県南三陸	23
仙台市宮城野区		1	10
仙台市宮城野区		17	12
農村地	山形県朝日町	20	16
	宮城県加美町	20	19
	宮城県栗原市	23	16

が、農村地に次いで市街地が高いと思われる。

愛着を感じる質問項目として、住宅地では住み慣れた環境に居心地の良さを感じている一方で、愛着度の高い農村地は居心地の良さに加え、「自慢する」「まちらしさがある」等のまちへの想いが感じられる項目が高い評価に繋がった。

まちに対し「満足している・大切に思う」等の質問に対し、合計点が高いほど愛着度が高いとした。地域別で見ると、農村地は暮らしにくさがあるものの、愛着度数としては一番高い。住宅地と市街地は個人差によってバラつきがあるが、農村地に次いで市街地の愛着度が高いかと思われる。

まち並みの変化に関しては、昔と比べて現在の方が良いとの回答が多数だった。理由として住宅地では「商業施設が増えたから」というように利便性を重視する傾向が見られ、市街地・農村地ではまちの雰囲気に着目し、まちの活性化を願う意見が挙げられていた。

SD法による愛着度調査では農村地が一番高く、次いで市街地が高い傾向が見られた。愛着を感じる質問項目として、住宅地では「居場所を感じる」や「リラックス、安心できる」が高く、住み慣れた環境に居心地の良さを感じているようである。一方で、愛着度の高い農村地は居心地の良さに加え、「自慢する」「まちらしさがある」などと言ったまちへの想いが感じられる項目が高い評価となっていた。

#### 7-6 地域の利用特徴と捉え方

全地域共通して、普段「よく利用する場所」は生活家事を伴うチェーン店のスーパーが多い。その中で市街地は公共の施設の利用も高く、イベントにも積極的で、一番地域に密着している様子が窺えた。「まちの好きな場所と象徴的な物」に関して、市街地と農村地では公園や山川のような自然要素を多く挙げているのに対し、住宅地では好きな場所に自宅、象徴的な物にチェーン店や規模の大きい施設を示す割合が高かった。

まちとして捉える範囲に関して、認知地図を描いた学生よりも家族等の対象者の方がまちを広く捉える傾向があり、まちの象徴的な物も広範囲で捉えている結果となった。通学を中心とした生活を過ごしてきた学生より、家族や地域の方々がより広範囲で活動をしているからであると思われる。また、認知地図の描写により視野が狭くなった調査手法の限界も一因であると考えられる。一方、居住年数による違いは特に見られなかった。

#### 7-7 「愛着」に影響を与える要素

全地域が「人柄」と「行事」の選択が多く、地域との関わりが愛着に影響を与えている事が分かった。また、地域別の特徴として住宅地は商業の充実、市街地は結束力、農村地は地域性や自然が感じられる風景が次いで挙げられており、どの地域もわがまちの特徴を捉えた街並が愛着のポイントとされている傾向にあると見られた。

## 8. 認知度と愛着度との関わり

各々の結果において、描画範囲を通してわがまちとしての認知範囲が広く、描画要素が多様ほど愛着度も高いという傾向が見られた。地域別では町全体に視点を置き、広範囲で認知していた農村地の愛着度をもっとも高かった。「認知最大範囲」と「まちとする範囲」の関係について、比例しているものは半数であり、住宅地対象者の割合が高く、わがまちを認知範囲以上の広範囲で捉えている対象者が農村地に多い事が分かった。また、認知地図の中心とアンケートで示されたまちの中心の関係性は見られなかった。

## 9. まとめ

認知範囲は全地域共通し学区内で留まる傾向にあり、学校を記憶の領域と定める特徴が見られた。認知地図においては、市街地が一番正確且つ詳細で面的に描写されており、まちが活用されている姿を捉える事が出来た。愛着度においては、わがまちを町内で捉える農村地が一番高い結果となった。また、認知地図調査に協力した対象者の描写密度が濃いほど愛着度も高くなる傾向も見られ、少なからず認知度と愛着度は関係性があるものと考えられる。

地域別で認知地図の構造と評価についての考察を通して、市街地と農村地は公共施設や公共空間の利用が比較的多くまちを活用しているといえるが、住宅地では自宅周辺に留まっており、普段の生活は大型チェーン店に依存している傾向がみられた。

まちへの認知については、通学距離と遊び場の距離は比例している関係にあり、それによって行動範囲やまちとして捉える範囲を徐々に広げている傾向があった。また、地域に関係なく「認知範囲≒学区内」とされ、通学距離は認知に対して大いに影響を与えている事が分かった。さらにまちの評価範囲も学区内である事から、「通学距離=生活範囲=認知範囲」が成り立つと考えられる。

まちへの愛着度については、よく利用する場所や利用目的に違いは見られなかったものの、利便性の高い市街地では公共施設の利用が比較的高い傾向が見られた。愛着のポイントとしては、住宅地で「商業の充実」、市街地で「結束力」、農村地で「地域性」「自然風景」のように、地域ごとで特徴がみられた。また、全地域共通して「人柄」と「行事」の選択が最も多く、地域との交流が愛着に影響を与えているようであった。

認知度と愛着度との関係を探ったところ、描画要素が多様であり、且つ密度が濃い認知地図を描いた学生ほど愛着度が高いという結果が見られた。また、それは市街地に多い傾向にある。町全体を視野に入れ、広範囲にわたり認知地図を描いていた農村地の愛着度数が最も高い結果となった。

認知範囲と生活評価範囲の関係については、それぞれの



地域環境によって広狭となるのは当然であるが、生活範囲が認知範囲を占める割合が大きいほど、まちを細かく把握し、よく活用している事が分かった。

「認知最大範囲」と「まちとする範囲」の関係は、半数が一致している結果となり、わがまちとする範囲を認知範囲以上で捉えている対象者は農村地に多く見られた。

また、まちとして捉える範囲に関して、認知地図を描いた学生よりも家族等の対象者の方がまちを広く捉える傾向にあり、まちの象徴的な物も広範囲で捉えている結果となった。通学を中心とした生活を過ごしてきた学生よりも家族や地域の方々がより広範囲で活動をしているからであると思われる。

本研究を通し、「まち」には公共施設や商業施設等の様々な機能が備わっている事や、自然豊かで美しく落ち着ける場所がある事が求められているということが分かった。

本研究は居住者の視点からまちへの認知と愛着を捉え、地域に愛されるまちとして必要な環境要素を捉える事ができた。一方、認知地図は人によって表現が大きく異なる為、今回のような少数なサンプル数では一般論としての結論には限界があると思われる。

本文は宮城学院女子大学生活文化学科2010年度・菅原沙枝理の卒業論文をもとに著者の独自の考察を加えたものである。

#### 参考文献

1. K・リンチ：都市のイメージ，岩波書店 1968
2. ロジャー Mダウズ：環境の空間的イメージ，鹿島出版会 1991
3. 加藤仁美：「イメージマップ」による個人の環境イメージと集落空間特性，日本建築学会計画系論文集 1997

#### 認知地図を通してみた地域への認知と愛着に関する考察

戦後、日本の街並みは大きな変化を遂げた。一方、国道・バイパス沿いの街並みの画一化によって、人々のわがまちへの誇りや愛着が薄れてきたと言われている。今後のまちづくりにおいて、生まれ育ったまちに対して、地域の人はどうに認識し、愛着を持っているのかを明らかにする必要がある。

本研究では「認知地図」（周囲環境の空間的配置に関するイメージを頭の中で記憶している地図）を通して見えてくるまちへの認知度（物理的認知）と思い入れである愛着度（感情的認知）を把握した。地域の人に認知されやすく、愛着が持てるまちとは、公共施設や商業施設などの多様な機能による利便性だけでなく、自然豊かで美しく落ち着ける場所があることも求められていることが明らかになった。

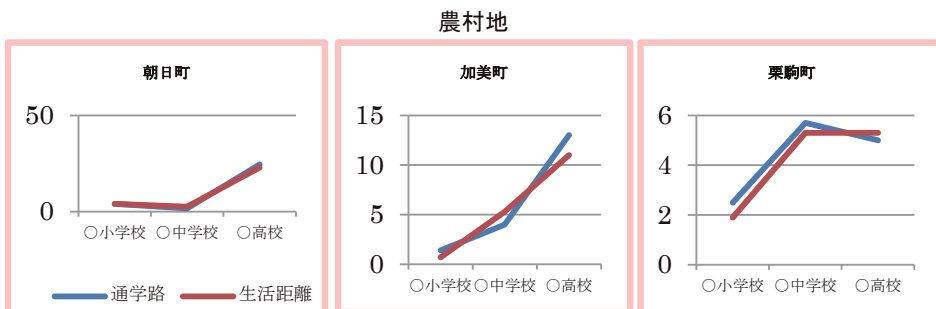
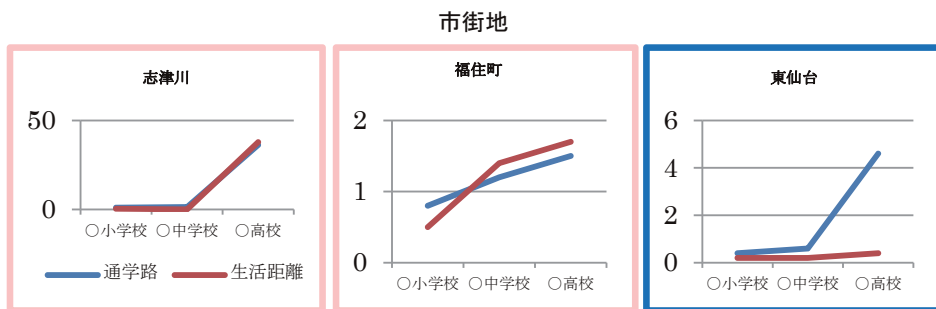
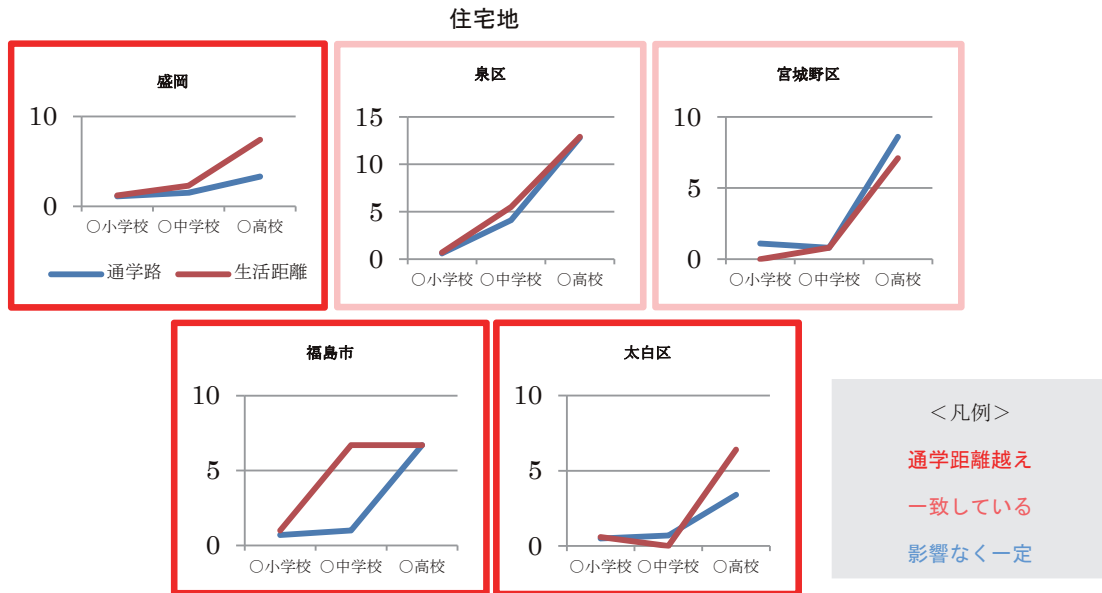


図4 通学路と生活距離・認知距離との関係

表9 地域別でみた生活評価の特徴（要素別）

生活評価		遊び場所			買い物	目印	お年寄り	好きな場所	嫌いな場所		
		小学生	中学生	高校生							
住宅地	盛岡	友達の家	バイパス沿いのチェーン店	市街地駅周辺	チェーン店	スポーツ施設	近所同士	家周辺の畑、庭	小学校前の道路		
		駄菓子屋 文具店				近所の幼稚園					
	泉区	児童センター	区の中 心市街地	仙台(中心市街地)	チェーン店	スーパー	スポーツ施設	自宅	国道沿い		
		スーパー									
	宮城野	友達の家	中学校	ジャスコ	チェーン店	病院	商業施設群 公設市場	近くの空き地	小学校の道		
太白区	文具店	モール	仙台(中心市街地)	チェーン店	市の体育館	3丁目公園	家(ベランダ)	モールからの帰り道(物騒)			
福島市	学区内	中心市街地	中心市街地	チェーン店	小・中学校 銀行のビル	スーパーの休憩場 公民館	自宅	特になし			
市街地	志津川	公園	本屋	隣町駅周辺	チェーン店	公園	スポーツ施設	海岸沿い公園	特になし		
		プール									
	福住	校舎	スーパー	ツタヤ	チェーン店	公園	高齢者施設	川沿い(堤防)	ごみ処理場		
		公園 田・川									
		自転車 駄菓子屋×2				動物病院				集会場	自宅
	東仙台	駄菓子屋	スーパー	カラオケ	チェーン店	公民館	高齢者施設	川・公園	(使用無)嫌いな犬がいる家		
公園		カラオケ	スーパー	ロータリー		公園 商店呉服店	ロータリー 商店				
農村地	朝日町	友達の家	文化施設	(隣市の)駅周辺カラオケ	チェーン店	温泉	公民館	公園	隣の市にある店舗までの道のり		
			町の川			公共施設					
	加美町	川	コンビニ	だんご屋	チェーン店	山	集会場	川沿い	山の裏		
		公民館、 集会場				スーパー				友達の家	温泉
		駄菓子屋				友達の家				イオン	自宅近くのランプ
	栗駒町	友達の家	コンビニ	コンビニ	チェーン店	中学校	農業工具店	球場	公園		
		駄菓子屋						喫茶店			

凡例

緑：自然要素

青：自宅

黄色：公共施設

橙：公益施設

ピンク：商業施設

茶：事務所

灰：工場・道路